

劇の構想は万葉ではないが、先生が屢々試みられてゐたもので、戦前国学院の郷土研究会の年中行事として、毎年のやうに水神祭を催した。祭神は津輕地方のお水虎様シッコの像を、仏師に模造させ、之に入魂して、常は先生宅の支閨神棚に祀つてあつた。その祭りにお神楽として河童劇をやり、毎回新しく脚本を書かれ、高崎正秀と私とが、シテアドをつとめ、学生の河童多勢と楽しんだものである。これは全く茶番劇であつたのだが、この支人の為の舞踊劇すら、茶番と評されることを予め自任してをられる。伊馬春部氏の伝へた文には「生命の永続について希望を失つてしまつた近代人は、その為にかういふ作物を見ても真实性を感じないかもしれない。さういふ人にとつては、単なる茶番にすぎないことになつてしまふ。作者に言はせれば、茶番も結構、さうあることを寧ろ望んでゐるやうである」とある。併し、私たちは少くとも、万葉の歌をどう劇化してゐるかを、期待して見に行つたのであつたが、それはむしろどうでもよいことかも知れぬ。さうしてこの舞踊劇に語られてゐることは、先生が學問の上で追求された、古代人の生命觀、永遠の信仰が、万葉の歌を活用して具体化されたものと考へられる。其は若き頃の作「大山守」の劇詩にも、或ひは「死者の書」にも通じよう。この作と時を同じくして成つた論文は「民族史觀における他界觀念」にも思ひあたるものがある。つまりは永遠の生命を教へて、先生は今は靜かに常世辺の翁とをち返つてをられるのだ。

黄泉の草の上

森 本 治 吉

(一)

九月廿三日二時、齋藤茂吉・釈超空両氏追懷講演会を開く——かういふ日本歌人クラブの幹事会の相談を終つて、唯今帰宅したところである。私はこの講演会の成功の為に全力を盡して働くつもりである。

一方は土の匂濃き山形、一方は近松西鶴以来のダンディーの街。蜜骨を誇つて好んで論争を卷起す癖と、一度も學術論争を展開しなかつた柔軟性。医師の本職、国語科大学教授。

ずるぶんな差異があつたにかかはらず、多分の相似点があつた。共にアララギ同人として作歌した事。本業のほかに幅広い文學活動を持続した事。共に神懸質な一面がありつつ驚くほど仕事に粘り強い。共に一団のグループの登頂に在つて宗祖的位置を占め、齋藤先生は写生主義短歌の、折口氏は民俗學集團の深い尊敬の的となつた事。その上、逝去の時期がごく相近かつた。

だから我々歌人は、茂吉を言へば超空を想ひ、超空を筆にすれ

ば屢々茂吉に言及する慣はしが今に絶えない。私はこの講演会に全力を盡すつもりである。

(二)

追悼記は、窮極は筆者自身の見方をペンを通して書き綴る仕事らしい。

学人折口博士の印象で、一番強烈に焼きつけられてゐる事は、歌誌「白路」にも書いた事だが、金銭に潔癖だった事である。若年までの事は知らず、私の親しくした中年以後の氏はこの特色に輝いてゐた。他にも私費を学問公共の為に使はれた話を度々聞くので己一人の見誤りではあるまいと思ふのだが、私の経験は廿年近い以前にさかのぼる。

当時私の勤務してゐた日本大学上代文学研究会で、氏の講演をお願ひした。その御礼に貧乏な会ゆゑ金一封を包むだけの余裕も無い。それで何か品物でも差上げるやうにと幹事の一人に頼んで帰宅した。それで事はすんだものと思つて安心してゐた。すると五、六日して折口博士のところから小包がとどいた。あけてみると三越の靴下がはひつてゐる。どうも腑に落ちないと思ひつつも向うからこちらへの贈物と考へて御礼状を出した。

ところが、翌々日幹事に会つてこんな贈り物もらつた、と話したら、

「三越ですか？ 三越なら会から差上げた靴下ですよ。」
「えっ！」

と言つたまま、まことに開いた口のふさがらぬ心地がした。つまり、御礼品など受け取らぬといふ意志表示である。その時はあんまり驚いたまま弁解の手紙も出さなかつた。向うからも言つて来られない。会つてもすまして居られる。

それから十余年経つて、私は熊本時代出して休刊した「白路」を復活した。その三年目の早春、突然氏から長詩の原稿がとどいた。読みみるに、琉球出身の言語学者伊波普猷氏の挽歌である。伊波氏には私も非常に親しく交はつた仲なので一読大きな感激を覚えた。

青海の瞳

わが友の伊波^{イハ}の^{オホメシ}大主 老い過ぎて、
いまは苦しと 言ひにけるはや

わが友は 安けくなりぬ。国はなれ
つひに 思はむ何ごともなき

あつき日に 苦しむときに、
電報ぞ せつなかりける——、

ワレヤメリ ミオクリタマ

へイフア

わが伊波も つひに死ぬらし。
妻の子に思ひ残れど——
しかも 身の軽きをおぼえ——
安らかに待ちつゝあらむ——。

千瀬の波 白く砕けて、
後 久し 立つ波もなし——。

限りなき青海の 面は
しづかなる瞳をあきて——
大空を 思ひ見るらし

おほ空を思ひ見るらし 君が目に、
つぎ／＼消ゆる しづかなる影

わが思ふ誰かれも みな
幸うすき殿の末にして、

おもしろき何ごとも なし——
あはれ あはれ
つぎ／＼に 死にて やすらふ

小躍りするほど嬉しくて、町重な札状と共に若干の稿料をお贈

りした。

それから三、四ヶ月、我々が羽田春堃氏（折口博士や武田博士の御同窓の書家）の御宅でお昼飯を食べながら清談を交す会を催した。武田・折口・金田一・金沢庄三郎・橋本正治氏といった顔ぶれで、その会は折口博士の命名で「高山会」と名づける事になったが、会の進行途中一時中休みのやうになつてみんなが席を立つた折があつた。——すると、私のそばにスツツと近づいて来られた。さうして、紙包を持つた右手を差出しながら、

「わかつてるぢやないか。」

といふ意味の言葉を言はれる。その語句は五年の歳月に埋没して忘れたが、その時の宮本武蔵の構へといつた、一種鬼気迫る気魄はなかなか忘られるものではない。

その紙包に、三、四ヶ月前の為替がそのままはひつてゐたのである。

(三)

昭和廿六年晩秋、国学院総長室で、沢瀉・武田・折口三博士と森本、それに故藤田君夫人千代子さんがお給仕して、御飯をいただきながら上代文学会の創立相談をした事は本誌創刊号に記した。その席では折口博士は随分元気できげんよくいろいろ話をされ、会の事も種々提案されたが、お五年とつたとかとらぬとかの話に

なつた時、沢瀉先生の顔を見つめながら、やや冷やかすやうに、「沢瀉さんは好男子だから、何時までも変らない。」と言はれるので、みな吹き出すやうに笑つてしまつた。

一休が、きげん・なきげんの甚しかつた人柄だと聞いてゐる。不運にも気持の谷にぶつかつた人で、ひどい雷を喰つた話を折々聞いてゐる。この点、氏の万葉学が贅舌兩説に包まれてゐるのに何か似てゐる。

しかし、私は昔から良い面ばかりを見せられて過ぎしたのは幸福であつた。学業と作歌とを兼ねてゐる点、アララギの先進後輩といふ関係からだらう、会ふとしゃべつてからニコニコされる様子で、よくからかはれた。学業の事や会の事やで、どうも苦しくてたまらぬとぐちをこぼすと、

「それが『万葉に生くる者』だから。」

と言つて、酸っぱいやうな、出し惜しみするやうな笑ひ顔をされたものである。これは三、四度。

さうじて、『万葉に生くる者』は好きだつたらしく、よく口にされた。

(四)

寂しい思ひ出が一つ。

三、四年以前。

或る所で、斎藤先生と筆者と何となく不仲になつてゐる訃あひをうちあげた。

「いつそ斎藤先生をお訪ねしてトコトンまで話してみたら、といふ氣もしますが、その結果が悪くて大きく決裂したら、とも氣づかはれるので、進退に迷つてゐます。」

と言つて、処置の指針をうかがつた。氏は、私の顔ならぬ、あらぬ方に眼を走らせたまま、

「時を待つのですね……時を。」

とつぶやくやうに。

しかし、待つほどの年数も経ぬ間に、先生は薨去された。半年過ぎて、忠告の主もあとを追はれた。

嗚呼、「安らかに待ちつつあらむ——」今伊波氏とも斎藤先生とも黄泉の国の夏草の上に鼎坐して昔語りして居られるであらうか……。